5/8

道標

DŌ HYŌ

ユーモア忘れぬ人々

サンタバーバラの思い出

村川　庸子
敬愛大国際学部教授

初めてアメリカへ行ったのは大学院の1年の時でした。大学卒業直前の3月に結婚し、4月のガイダンス初日に交換留学生として1年間、カリフォルニア大学の大学院で学ぶプログラムを知りました。

アメリカ留学は子供の頃からの夢でした。帰宅した連れ合いに話したら、思いがけず留学にOKが出ました。翌日、大学に意向を伝え、選考を経て、12月にはひとり、羽田空港を飛び立ちました。

サンタバーバラはロサンゼルスの北120キロの海岸沿いの町で、スペイン風の白い壁とオレンジ色の屋根の家々が軒を並べ、ブーゲンビリアなど熱帯の花が年中咲き誇る景勝の地です。

寮はアメリカ人学生用のものを選びました。英語の能力試験に合格し、いきなりアメリカ人学生と同じ教室に放り込まれました。

あちらの大学生はよく勉強するといわれますが、本当です。毎日、毎日、朝から晩まで書物を読み続けました。それでも試験直前には読み切れていない本が山積みになりました。

講義で黙って座っていたら誰にも相手にしてもらえません。ともかく何かを発言する、そのためにはまた本を読み続けなくてはなりません。人生でこの時ほど勉強したことはありません。それでもこの国のおおらかさと人々の優しさを感じる得難い1年になりました。

一つだけ、今でも思い出すと大声で叫びそうになる、恥ずかしい経験をご紹介しましょう。

ある日、寮の壁に張り紙を見つけました。『○月○日24時に避難訓練実施』。実施時間に目を疑いました。

10日ほどして真夜中にサイレンが鳴りましたが、そのまま寝ていました。ドアの隙間から煙が入ってきました。臭いはなく、逃げなくても大丈夫のようです。そのうち、部屋のドアを開けて中に人が残っていないか、確認する声が聞こえてきました。少しずつ声は近づいてきます。とうとう私の部屋の番です。カチャッ。

ふるさと伝言

「避難訓練です」「すみません、知っています」「すぐに出てください」

発煙筒の煙が立ち込める中、手探りで階段を下りました。出口から外をのぞくと、芝生に大勢の人が並んでいます。背中をポンと押されて、外へ出ました。その時、マイクを通した声が後ろから響きました。「ただ今、最後のひとりが救出されました」

これが日本ならこっぴどく怒鳴られていたでしょう。あるいはベッドから起こされることなく「不参加、何名」で済まされていたかもしれません。

この時の私はというと…。心底、悪かったと思いました。昼間は初夏のようでも、夜は冷え込む土地です。私が出てくるまで皆、屋外で待っていました。それなのに、誰も文句を言いません。「よかったね、ヨウコ。助かって」と笑顔で言葉もかけられました。

やるべきことはきちんとやる、そしてユーモアも忘れない。そんな人々が大好きです。

（むらかわ・ようこ、今治市出身）